

## 公開天文台100周年記念 企画イベント

# 「みんなで見よう！メシエ天体」開催中！

日本に“公開天文台※1”が誕生して100年を迎えようとする2025年から2026年にかけて、日本公開天文台協会(JAPOS)※2の「公開天文台100周年記念 企画イベント」として『みんなで見よう！メシエ天体』キャンペーンが開催されます。メシエ天体ってなに？どうやって参加すればいいの？そもそも公開天文台100周年って？皆さんの疑問にお答えしましょう。もう1枚のポスターも併せてご覧いただき、ぜひキャンペーンにご参加ください！

## メシエ天体ってなんだろう？

メシエ天体とは、「メシエカタログ」と呼ばれる天体カタログに載っている天体のこと。18世紀から19世紀にかけて活躍したフランスの天文学者シャルル・メシエ(Charles Messier)が作成したため、彼の名で呼ばれています。

メシエは彗星捜索者(コメットハンター)として知られています※3。彼が彗星を探そうと、星団や星雲といった天体はボーツと見えるために彗星と区別がしにくく、非常に“邪魔”でした。彗星は日々、天球上での位置を変えますが、星雲や星団の位置は変わりません。そこで、彼はそれら紛らわしい天体のリストを作成、発表します※4。それが「メシエカタログ」なのです。

## メシエ天体にはどんな天体が載っているの？

メシエ天体に載っている天体は、大別すると星団、星雲、銀河です※5。メシエが使用していた望遠鏡は口径が最大でも19 cmで、現在の同口径の望遠鏡に比べれば性能が劣るものでした。そのため星団の多くも星の集まりとは認識できずボーツと見たのでしょう。カタログには多数の星団が収録されています(肉眼でも星団とわかるプレヤデス星団などが加えられたのは番号の体裁を整えるためだったと言われています)。

星団は散開星団と球状星団に、星雲は散光星雲※6、惑星状星雲、超新星残骸に、銀河は渦巻銀河や棒渦巻銀河、楕円銀河などに細分されます。それぞれがどんな天体かは、ぜひ調べてみてください。

## どうやってキャンペーンに参加すればいいの？

参加方法はかんたん、JAPOSの会員施設をはじめ、その他、天文施設や天文愛好家の皆さんが行っている観望会(星空観察会)に参加して天体を観察、「今、天文台にいます」掲示板に“見た！”と報告するとともに、キャンペーンサイトから観察記念「メシエ天体カード」をダウンロードしてください。どこに公開天文台があるかは、JAPOSのホームページなどを参照してください。

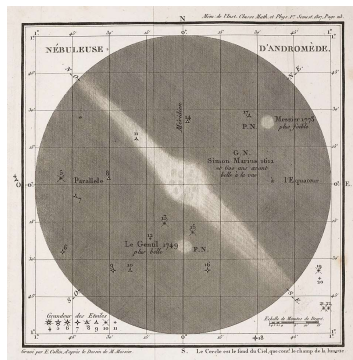
## 公開天文台100周年って？

日本の公開天文台の始まりは、1926年11月21日に民衆天文台として開設された「倉敷天文台」※7。2026年11月21日に倉敷天文台が開台100周年を迎え、それを以て公開天文台100周年としています。「みんなで見よう！メシエ天体」以外にも様々な企画が予定されていますので、ぜひ公開天文台100周年特設サイトをご覧ください、ご参加いただければ幸いです。

戦後の倉敷天文台 [提供：倉敷天文台] ▶



▲シャルル・メシエ (1730-1817)



▲メシエによるアンドロメダ銀河M31のスケッチ



▲「メシエ天体カード」



キャンペーンサイトはこちら▲

※1 研究だけでなく市民への“公開”を目的とした天文台のこと。日本には300施設もの公開天文台があり、まさに公開天文台大国と言える。

※2 公開天文台の発展と、職員の資質向上や交流を目指すことを目的とした団体。2005年に発足。



※3 フランス国王ルイ15世はメシエを「彗星の狩人」と呼んだと言われる。メシエは生涯で13の彗星を発見した。

※4 1774年に第1巻(M1～M45)を、1781年に第2巻(M46～M68)を、1784年に第3巻(M69～M103)を発表した。その後、別の天文学者によってM104～M110が追加されている。最後のM110が追加されたのは1966年で、実はかなり最近のこと。

※5 一部例外あり。例えばM40は二重星の可能性がある。M73は星の集まりだが、重力で結びついていない星群と考えられている。

※6 散光星雲には、電離水素領域(HII領域)と反射星雲とがある。

※7 山本一清(京都大学教授)と水野千里(アマチュア天文家)らの運動により、原澄治(実業家)が資材を投じて設立した。設置された望遠鏡はイギリスより購入した口径32 cm反射望遠鏡。現在は1952年に建造された5 mドームを備えた天文台の建物を原澄治・本田實記念館として公開している。

